

帝国主義形成期のドイツ貿易構造

——商品構成を中心として——

藤村幸雄

まえがき

一 概 観

二 農業国との貿易構造

1 オーストリア・ハンガリー

2 ロシア

三 工業国との貿易構造

1 イギリス

2 アメリカ合衆国

むすび

まえがき

周知のように、ドイツの金融資本は一九世紀末葉から二〇世紀初頭にかけて重工業における組織的独占体

の形成を中核として本格的な成立をみるのであるが、この時期におけるドイツの対外貿易構造については、すでに別稿においてその総額の推移や地域別構成などのあり方を、国家の通商政策ないし貿易相手国との通

商関係との相互的関連という観点からきわめて概括的に考察した。⁽¹⁾

地域別構成においては、輸出におけるヨーロッパ地域への集中傾向と輸入面でのヨーロッパの地位低下と北アメリカ地域のその上昇傾向という対照的な動向が顕著にみられたのであるが、このことは当時のドイツの通商政策とくに一八九〇年代以降に展開された中・東欧の主要貿易相手国との通商条約網の形成政策と相当密接な関連をもっていたと考えられるのであるが、小稿においては、やや角度をかえて、かかる貿易構造のあり方を主として商品別構成の面から考察してみよう。まず、一九世紀末葉から二〇世紀初頭にかけてのドイツ貿易の商品別構成について一般的な概観を試み、ついでドイツの通商相手国のうちから貿易規模の点で重要とおもわれる四ヶ国を抽出し、主として一九〇二年におけるそれら諸国との輸出入商品構成という観点から、いわば個別的、断面図的に検討することとした。そのさい、後進農業国のグループからオーストリア・

ハンガリーおよびロシアを⁽²⁾、工業国のグループから先進工業国イギリスとドイツとほぼ同じ時期に急速な資本主義的工業化をあげつつあったアメリカ合衆国をとりあげることとした。⁽³⁾

(1) 拙稿「金融資本成立期におけるドイツ貿易構造的特質」『同志社大学経済学論叢』第二三卷二号。

(2) この時期のロシアを、たんに後進農業国と規定するには問題が残るが、同国の輸出入商品構成をみると、たとえば一九〇〇年において、輸入総額六億二〇〇〇万ルーブリのうち金属および金屬製品が一億四二〇〇万ルーブリ、化学製品が二八〇〇万ルーブリなど工業製品が大きな割合を占め、輸出でも総額七億一六〇〇万ルーブリのなかで穀物が約四三%にあたる三億六〇〇万ルーブリに達しており、貿易構造にかんする限り、なお農業国的地位にとどまっていたといつてよい。さしあたり、メンデルソン『恐慌の理論と歴史』邦訳、第四分冊、四〇七—八頁参照。

(3) なお、ドイツのこれら諸国との通商関係は、前掲の別稿でも明らかにしたように、オーストリア・ハンガリーおよびロシアについては、関税の相互的軽減を規定する長期安定的な通商条約をとり結んでおり、イギリスおよびアメリカ合衆国に対しては、通商条約または協定にもとづいて最惠国條款の相互的供与を約しながらも、その関係はきわめて不安定かつ不自由であるという特徴をもっていた。

一 概 観

ドイツの対外貿易は、一九世紀七〇年代以降、国内における重工業を中心とする急速な工業的發展に照応して、輸出入商品構成の面においても大きな変容をとり、ぜんじ新興工業国としての特徴的な構造をうちだすに至った。第1表は、一八七五年から一九〇五年に至る輸出入商品の群別構成を五年目ごとに表示したものであるが、これによると、輸出では食料品、家畜および工業原料の比重が低下して完製品の割合がいちじるしく高まり、二〇世紀初頭には輸出総額の三分の二近くに達している。完製品のなかでは軽工業製品に比べて鉄鋼製品、機械などの重工業製品の比重がいちじるしく伸びているが、このことを数字的に検証することは統計技術上きわめて困難であるが、ある統計によれば重工業製品の占める割合は、七五年には輸出総額の二七％であったものが、九〇年には二九％、一九〇〇年には四〇％にも達している。⁽¹⁾

他方、輸入面においては全体としては顕著な変化はみとめられないが、工業原料の比重がわずかながら増大し、これに対して完製品の輸入が相対的に減退していることが注目される。食料品、家畜の割合はほぼ横ばいで、その結果二〇世紀初頭には工業原料が輸入総額の半ば近くに達し、食料品、家畜が約三割強、完製品が二割弱という構成を示し、工業原料と食料品、家畜を合計すれば全体の約四分の三に上っている。

このような商品構成における変化は、いうまでもなくこの時期における重工業を中心としたドイツ資本主義の發展に対応したものであって、新興工業国としていわば当然の帰結であるともいえるのであるが、問題の核心はむしろかかる貿易構造が、自由主義段階における工業国のそれとは異なり、国家の諸政策や独占体のさまざまな市場対策によって裏打ちされている点にあるといえよう。その結果、ドイツは輸出入商品構成にかんする限りでは先進工業国イギリスのそれとほぼ類似した形態をとるに至っている。⁽²⁾ もちろんこれは商

帝國主義形成期のドイツ貿易構造 (藤村)

第1表 輸出入商品群別構成

(A) 輸出 (100万マルク)

年次	工業原料	完製品	食料品畜 食家	貴金属	総額
1875	837 (32.7)	965 (37.7)	688 (26.9)	68 (2.7)	2,560 (100.0)
1880	774 (26.0)	1,492 (50.1)	656 (22.1)	53 (1.8)	2,976 (100.0)
1885	530 (18.2)	1,797 (61.7)	528 (18.2)	55 (1.9)	2,911 (100.0)
1890	708 (20.8)	2,147 (63.0)	470 (13.8)	83 (2.4)	3,409 (100.0)
1895	722 (21.1)	2,179 (63.7)	416 (12.1)	106 (3.1)	3,424 (100.0)
1900	1,111 (23.4)	2,982 (62.7)	517 (10.9)	141 (3.0)	4,752 (100.0)
1905	1,400 (24.0)	3,823 (65.4)	507 (8.7)	110 (1.9)	5,841 (100.0)

(B) 輸入

年次	工業原料	完製品	食料品畜 食家	貴金属	総額
1875	1,641 (45.9)	727 (20.4)	1,158 (32.4)	45 (1.3)	3,573 (100.0)
1880	1,364 (48.0)	515 (18.1)	924 (32.5)	40 (1.4)	2,844 (100.0)
1885	1,199 (40.3)	830 (27.9)	892 (30.0)	52 (1.8)	2,976 (100.0)
1890	1,764 (41.4)	981 (22.9)	1,397 (32.7)	127 (3.0)	4,272 (100.0)
1895	1,805 (42.5)	925 (21.8)	1,389 (32.7)	125 (3.0)	4,246 (100.0)
1900	2,803 (46.4)	1,199 (19.8)	1,762 (29.2)	277 (4.6)	6,043 (100.0)
1905	3,457 (46.5)	1,328 (17.9)	2,343 (31.5)	307 (4.1)	7,436 (100.0)

カッコ内は百分比。
Statistisches Handbuch für das Deutsche Reich, 1907, Teil 2, SS.
9-15. により作成。

品構成を全体としてみた場合にいうることであって、個々の通商相手国についてはイギリスとは相当異なつた特徴的な構造を示しているが、この点については次項で改めて考察することとしたい。

(1) メンデルソン、前掲書、邦訳、第三分冊、八三—一三頁参照。
(2) たとえば、一九〇〇年におけるイギリス貿易の商品群別構成をみると、資料の制約上商品分類が異なるのでドイツと直接対比させることは困難であるが、輸出では工業製品が約九〇%を占め、輸入では食料品および繊維原料が合わせて約六〇%を占めている。輸出工業製品のなかでは、繊維製品の割合が依然と

して高く、総輸出額の約四割に上り、輸入では繊維原料以外の工業原料を考慮すれば、食料品および工業原料の割合は両国ではほぼ同じ大きさであったとみるのができよう。 Mitchell & Deane, Abstract of British Historical Statistics, 1962, p. 298 ff. 参照。

二 農業国との貿易構造

1 オーストリア・ハンガリー

オーストリア・ハンガリーはドイツの貿易相手国のなかで重要な地域の一つであって、一九〇二年において同国向けの輸出は五億三三〇〇万マルクで輸出総額の一・一%、輸入は七億二〇〇〇万マルクで総輸入額の一・二・四%に達し、輸出ではイギリス、アメリカ合衆国につき、輸入ではアメリカ合衆国、ロシアについてそれぞれ第三位を占めていた。他方オーストリア・ハンガリーにとっては、ドイツからの輸入は総額の三・八・四%、ドイツへの輸出は総額の五・一・四%にも上り、最重要の市場であった。⁽²⁾ドイツの同国に対する輸出入商品の構成について、それぞれ価額の大きい順

に一〇位までをとり出して、その価額と当該商品の輸出入総額に対する割合などを示したものが第2表(A)(B)である。

まず輸出についてみよう。輸出額の大きいものは石炭を筆頭として書籍類、棉花、梳毛、機械および部品、毛織糸、鉄鋼製品、エナメル革などであって、全体として工業製品の比重が高いが、このうち重工業製品とみられるものは機械および部品、鉄鋼製品など、軽工業製品に属するものが梳毛、毛織糸、エナメル革などである。他方これをオーストリア・ハンガリー側のドイツに対する依存度という観点からみると(A)表末尾欄で見られるとおり、当該商品の輸入総額のなかでドイツ品の占める割合が高いものはコークスの九六・六%をはじめとして、石炭、梳毛、エナメル革、機械および部品などであった。

他方、輸入については褐炭、建築用材、卵、大麦、牡牛などの順位となっており、一〇位までのものはすべて農産物、原料品に属するものである。ドイツの同

帝国主義形成期のドイツ貿易構造（藤村）

第2表 オーストリア・ハンガリーとの貿易構造（1902年）

(A) 輸出

(100万マルク)

順位	品目	オ・ハへの 輸出額 (A)	当該商 品 (B) 輸出総額	A/B	オ・ハの輸 入総額 (C)	A/C
1	石炭	64.5	208.8	(%) 30.8	73.5	(%) 87.7
2	書籍類	38.2	85.6	44.6	37.7	×
3	棉花	19.4	35.0	55.4	130.8	14.7
4	梳毛	17.2	27.0	63.7	25.3	67.9
5	機械および部品	15.7	197.4	7.9	36.0	43.6
6	毛織糸	14.4	62.4	23.0	34.1	42.2
7	鉄鋼製品	13.1	242.6	5.4
8	エナメル革	11.8	69.8	16.9	20.3	58.1
9	コークス	11.6	45.8	25.3	12.0	96.6
10	印刷用品	11.4	102.1	11.1	4.7	×

(B) 輸入

順位	品目	オ・ハから の輸入額(A)	当該商 品 (B) 輸入総額	A/B	オ・ハの輸 出総額 (C)	A/C
1	褐炭	63.1	63.1	(%) 100.0	58.8	(%) ×
2	建築用材	58.4	92.4	63.2	69.7	83.7
3	卵	50.2	114.6	43.8	95.3	52.6
4	大麦	44.3	146.8	30.1	53.5	82.8
5	牡牛	33.5	34.0	98.5	41.4	80.9
6	牝牛	25.7	39.2	65.5	23.1	×
7	麦芽(大麦の)	21.0	21.0	100.0	38.3	54.8
8	家畜類	13.3	24.5	54.2	9.0	×
9	寝具用羽毛	13.1	21.4	61.2	13.0	98.5
10	クローヴァ種	12.5	32.7	38.2	12.6	99.2

…は不詳, ×は両国の統計のくい違いのため計上できないが, ほぼ100%と推定されるもの。

Josten, P., Deutschlands Stellung im Welthandel, Eine wirtschaftspolitische Studie, 1908, SS. 24-29. により作成。

国品に対する依存度は褐炭、麦芽（大麦の）のそれぞれ一〇〇％をはじめとして相当高く、オーストリア・ハンガリー側にとってもドイツへの輸出が表示の品目についてはクローヴァ種の九九・二％、寝具用羽毛の九八・五％を筆頭としてすべて五〇％以上に達しており、きわめて大きいことが注目されよう。

かようにドイツのオーストリア・ハンガリーとの貿易は、工業製品輸出、農畜産物および原料品の輸入という工業国型の商品構成をとっているが、こうした傾向はたんにドイツの工業的發展にともなう両国のあいだの国際的な分業関係の形成を意味するだけでなく、ドイツの同国に対する通商政策、とくに一八九一年にいわゆる「大通商条約」の一環として締結をみた両国の通商条約によって促進されたことを見逃しえないのである。この条約では、ドイツ側が農産物、畜産物を中心として合計一九九品目について関税率の軽減を実施し、オーストリア・ハンガリー側は工業製品を中心とする四二三品目について同国の国定税率に対して平

均二〇ないし二五％におよぶ関税率引下げを認めただ³⁾であるが、上述の輸出入商品の大部分がかかる相互的な関税軽減の対象品目であることは十分注目されなければならぬであろう。

(1) Statistisches Handbuch, Teil 2, SS. 524-7.

(2) Josten, P., Deutschlands Stellung im Welthandel, Eine wirtschaftspolitische Studie, 1908, S. 23.

(3) 拙稿、前掲論文、七一―二頁参照。

2 ロシア

ロシアは、ドイツにとっては輸出で第五位、輸入で第二位を占める重要な貿易相手国であって、同国との貿易の拡大とくに輸出の伸長が、一八九〇年代後半における大不況からの脱出⇨景気好転の重要な支えの一つになったほどであった。以下、オーストリア・ハンガリーの場合にならって、一九〇二年におけるロシアとの貿易構造を主として輸出入商品の構成の面から検討してみよう。同年におけるロシアに対するドイツの輸出は約三億四三〇〇万マルク、輸入は約七億六〇〇

○万マルクで、差引約四億一七〇〇万マルクという大幅な輸入超過となっているが、その内容は全く工業製品輸出、食料品および原料品輸入という先進工業国対後進農業国の貿易構成を典型的にあらわすものであった。まず輸出について、その価額の多い順に一〇位までの品目を示したものが第3表(A)である。これによると鉄鋼製品の三一〇〇万マルク、機械および部品の二一〇〇万マルクをはじめとして、以下、牛馬皮、毛織糸、羊毛、棉花、毛皮、汽船、エナメル革、書籍類という順序であった。このうち工業製品とみられるものは鉄鋼製品、機械および部品、毛織糸、汽船などであり、なかでも重工業製品の割合がきわめて大きいことが特徴である。一方、これをロシア側のドイツに対する依存度という角度からみると、ロシアの当該品目の輸入総額中に占めるドイツ品の百分比は汽船の一〇〇%を筆頭として鉄鋼製品八七・五%、エナメル革八七・八%などとなっており、ここでも重工業製品についてのドイツに対する依存度が高い点が目立っている。

このように輸出は工業製品を中心とするものであったが、輸入面では輸出の場合とは全く逆に農産物、畜産物が大部分を占めていた。その内容を表示したのが同表(B)であるが、これによるとライ麦の九〇〇〇万マルク、小麦の八〇〇〇万マルク、大麦の七二〇〇万マルクと主要穀物が上位の三位までを占め、これに六位のからす麦を加えれば主要四穀物だけで輸入総額の四〇%弱に達している。このほかでは、卵、用材、とうもろこし、麩、亜麻、毛皮などが重要な品目で、一〇位までのうち工業製品といえるものは皆無の状態で、全く農産物、畜産物が中心であった。またこれらの品目の輸入総額中に占めるロシア品の割合もライ麦の八六・三%、からす麦の八三・六%をはじめとしていずれも相当高いものとなっている。

かようにロシアとの貿易は工業製品輸出、農畜産物および原料品輸入という工業国対農業国の貿易構成を典型的に示すものであって、この特徴は前項でみたオーストリア・ハンガリーの場合よりもいっそう明瞭に

第3表 ロシアとの貿易構造 (1902年)

(A) 輸出

(100万マルク)

順位	品目	ロシアへの 輸出額 (A)	当該商品 輸出総額 (B)	A/B (%)	ロシアの輸 入総額 (C)	A/C (%)
1	鉄鋼製品	31.0	242.5	12.7	35.4	87.5
2	機械および部品	21.5	197.4	10.8	104.8	20.5
3	牛馬皮	15.7	47.5	33.0	14.3	×
4	毛織糸	12.1	62.4	19.3	23.3	51.9
5	羊毛	9.0	29.6	30.4	42.6	21.1
6	棉花	8.9	36.0	24.7	55.7	15.9
7	毛皮	8.0	49.8	16.0	14.7	54.4
8	汽船	8.0	11.1	72.0	8.0	100.0
9	エナメル革	7.2	69.8	10.3	8.2	87.8
10	書籍類	6.9	85.6	8.0

(B) 輸入

順位	品目	ロシアからの 輸入額(A)	当該商品 輸入総額 (B)	A/B (%)	ロシアの輸 出総額 (C)	A/C (%)
1	ライ麦	90.5	104.8	86.3	151.0	59.9
2	小麦	80.7	271.6	29.7	350.4	23.0
3	大麦	72.8	146.8	49.6	138.7	52.4
4	卵	47.4	114.6	41.3	83.6	56.6
5	用材	40.1	155.2	25.8	114.9	34.9
6	からす麦	39.9	47.7	83.6	107.6	37.0
7	とうもろこし	33.3	93.3	35.6	90.1	36.9
8	荻	30.5	58.0	52.6	32.2	94.7
9	亜麻	30.5	35.0	87.1	111.0	27.4
10	毛皮	28.3	73.6	38.4	13.8	×

第2表参照.

Josten, a. a. O., SS. 31-34. により作成.

あらわれていたとすることができる。ところで、ドイツとロシアのあいだには一八九四年に有名な関稅戰爭のうちに通商条約が締結されていたが、ドイツからの輸出額の多い鉄鋼製品、機械および部品、毛皮などが、この条約にもとづくロシア側の関稅讓許品目であり、輸入の大部分を占める農産物、畜産物がドイツ側の関稅輕減の対象品目であったことは十分注目されなければならぬであらう。じじつ、ドイツはこの通商条約締結以後ロシア市場においてそれまで優勢であったイギリス製品を駆逐しつつ驚異的な輸出伸長をとげたのであって、すでに二〇世紀初頭には同国に対するドイツの輸出額はイギリスのほぼ二倍にも上つたのである⁽¹⁾。上述のロシアに対する典型的な工業国型の貿易構造は通商条約政策の顕著な効果という一面をもつものである。なおロシア以外の後進農業国に対する貿易構造も多かれ少なかれ類似した形態を示していたのであるが、つぎに工業国グループとの貿易構造について考察してみよう。

(1) やや年代はずれるが、一九〇四年におけるロシアの兩國からの輸入額を比較すると、鉄鋼製品ではドイツ五〇二万ルーブリ、イギリス一三万ルーブリで約四・四倍、工作機械ではドイツ二九六万ルーブリ、イギリス七九六万ルーブリで約二・八倍、化学製品はドイツ七八五万ルーブリ、イギリス一六八万ルーブリで約四・七倍などごとくに重工業製品についてドイツが圧倒的な優勢を示してゐる。Hoffman, R. J. S., *Great Britain and the German Trade Rivalry 1875-1914*, 1933, p. 136. なおロシア市場における兩國の抗争と通商条約との関連については Ibid, pp. 132-138. を参照されたい。

三 工業国との貿易構造

1 イギリス

ドイツの工業国グループとの貿易構造はきわめて複雑な形態を示し、一面では農業国的、他面では工業国的ともいふべき特徴をもっていた。まず先進工業国たるイギリスとの貿易構造について検討したい。

一九〇二年におけるイギリスとの貿易は、輸出が九億六六〇〇万マルク、輸入六億一〇〇〇万マルクで差引三億五五〇〇万マルクという相当大幅の輸出超過と

なっているが、貿易規模の点ではドイツにとって輸出で第一位、輸入で第四位を占め最重要ともいえる通商相手国であった。前例にならって、輸出入について価額の大きい順に一〇位までの品目をあげ、当該商品の輸出入に占めるイギリスとのその割合などを示したのが第4表(A)(B)である。

まず輸出についてみると砂糖が一億七〇〇万マルクと圧倒的な地位を占め、それについて粗鉄製品、鋼塊、鉄線の五二〇〇万マルク、以下半絹、絹布、毛織物、婦人服などの順序であった。このうち砂糖は、イギリス向けの輸出がその輸出総額の六七・五%を占め、他方イギリスにとってもドイツからの輸入が全砂糖輸入額の五四・四%に達するという状態で相互に依存度の相当高いものであった。しかもドイツの輸出砂糖については、国内農業保護政策の一環としてさまざまのあたりで国家の輸出奨励金ないし戻税が与えられており、このことがイギリス国内の砂糖精製業者および植民地の砂糖生産者を圧迫し、ドイツ砂糖に対する相殺関税

Countervailing Duty の設定要求となつてあらわれ、いわゆる公正貿易運動^{フェアトレード}の導火線となつたことは周知のとおりである。その他の品目では繊維製品や鉄鋼製品などがあげられているが、その多くがかなり加工度の低い製品であつた点が注目されよう。たとえば鉄鋼製品については粗鉄製品および鋼塊、鉄線などが合わせて五二〇〇万マルクで第二位を占めているのに対し、イギリス鉄鋼業との競争が強いとみられる加工度の高い精鉄製品は一〇位までにははいっていない(一五〇〇万マルクで一二位)。とくに粗鉄製品、鋼塊などについてドイツの輸出がイギリスの輸入総額の九〇・九%にも達している点は、両国の鉄鋼業がたんに競争する面だけでなく、イギリス鉄鋼業がドイツから鋼塊などの原材料や半製品の供給を受けてそれを圧延製品に加工するという相互依存的な関係にあつたことを推測せしめるのである。また一〇位を占める機械および部品についても、ドイツからの輸出品はかならずしもイギリス品との競争品ばかりではなく、ある程度非競争

帝国主義形成期のドイツ貿易構造（藤村）

第4表 イギリスとの貿易構造（1902年）

(A) 輸出

(100万マルク)

順位	品目	イギリスへの輸出額(A)	当該商品(B)輸出総額	A/B (%)	イギリスの輸入総額(C)	A/C (%)
1	砂糖	107.6	159.4	67.5	197.5	54.4
2	粗鉄塊, 製鉄	52.4	241.2	21.7	57.6	90.9
3	絹, 絹布	44.1	106.6	41.3	104.0	42.4
4	毛織物	39.7	168.9	23.5	118.3	33.5
5	婦人服	36.7	120.7	30.4	61.2	59.9
6	印刷用品	36.0	102.1	35.2
7	玩具	20.7	55.4	37.3	24.5	84.4
8	アニリン染料	20.5	89.3	22.9	20.4	×
9	木製品	17.5	26.7	65.5	26.5	66.0
10	機械および部品	16.7	197.4	8.4	89.8	18.6

(B) 輸入

順位	品目	イギリスからの輸入額(A)	当該商品(B)輸入総額	A/B (%)	イギリスの輸出総額(C)	A/C (%)
1	石炭	73.7	89.9	81.9	563.0	13.1
2	毛織糸	73.1	86.6	84.4	69.4	×
3	綿糸	41.2	51.1	80.6	148.9	27.7
4	塩漬にしん	24.1	49.9	48.3	59.2	40.7
5	ゴム類	18.8	60.9	30.8	73.4	25.6
6	セーター類	18.3	218.8	8.3	206.0	8.8
7	毛皮	17.4	68.9	25.2	28.6	60.8
8	機械および部品	12.4	48.8	25.4	140.8	8.8
9	羊皮	12.0	19.8	60.6	47.0	25.5
10	錫	11.6	35.6	32.5	14.3	81.1

第2表参照。

Josten, a. a. O. SS. 76-7. により作成。

的、相互補完的な面をもっていたようである。⁽²⁾さらに輸出品目のなかで玩具、木製品などかなり手工業的性質の強いものがかなりのウエイトをもっていることが目立っている。

他方輸入については同表(B)に示すように、石炭および毛織糸のそれぞれ七三〇〇万マルクをはじめとして綿糸、塩漬にしん、ゴム、セーター類などが上位にあり、一〇位までの構成は原料品、繊維製品、皮革類、水産物などがいりまじり、かなり複雑な内容となっている。なお、この表にあらわれないが第一九位に位置するブリキ板が輸入の絶対額はわずかながら輸入総額のうちイギリス品の占める割合が一〇〇%に上っていることは、イギリス鉄鋼業の技術的先進性をあらわすものとみることができよう。

かように輸出入商品の構成を全体としてみた場合イギリスに対するドイツの貿易構造は、相当程度農業国的ないし後進工業国的性格を多分に残していることが指摘でき、前述の後進農業国に対する関係とはきわだ

った対照を示している。

(1) イギリスへ流入したドイツ砂糖は、オランダを経由して間接に輸入されたものを除き、一八九〇年の五〇〇万ハンドレッドウエートから一九〇〇年には二二〇〇万ハンドレッドウエートと約二・四倍に増大している。Hoffman, op. cit., p. 111. また輸入砂糖と公正貿易運動との関連については、さしあたり Brown, B. H., *The Tariff Reform Movement in Great Britain 1886-1895*, 1943, p. 46 ff. などをご参照された。

(2) たとえばドイツはイギリスから農業機械、繊維機械などを輸入し、イギリスはドイツから新興産業である電気機械や鉱山機械などを輸入するというようにある程度の相互依存関係が成立していたといわれる。Hoffman, op. cit., p. 107.

2 アメリカ合衆国

さいごに工業国グループのなかでドイツとほぼ同じ時期に急速な工業的發展をとげつつあったアメリカ合衆国との貿易構造を検討してみよう。一九〇二年におけるアメリカとの貿易額は、輸出が四億四九〇〇万マルク、輸入が九億一一〇〇万マルクで差引四億六二〇〇万マルクというきわめて大幅の輸入超過となっており、この点はイギリスとの貿易が相当の輸出超過であ

ったことは対照的である。

まず第5表(A)によって輸出の品目別構成をみると、陶磁器の四四〇〇万マルク、綿製靴下および手袋の二二〇〇万マルク、半絹布の二一〇〇万マルクをはじめとして塩化カリウム類、アニリン染料、綿布ししゅうなどが上位を占めている。このなかで一応重化学工業製品に属すると考えられるのはアニリン染料だけで、他は綿製品、絹布などの繊維製品や陶磁器、玩具などの手工業的雑貨類、砂糖などの農産物が大部分であり、輸出構成を全体としてみると、ドイツはイギリスに對すると同様にかなり軽工業国ないし後進工業国的な性格をあらわしているといえよう。

つぎに同表(B)によって輸入面をみると、棉花の二億四四〇〇万マルク、小麦の一億三四〇〇万マルクがそれぞれ第一位および第二位を占め、この二品目だけで輸入総額の約四一％にも達している。しかもこれら二品目の輸入総額のなかでアメリカ品の割合は棉花が七六・四％、小麦は四九・三％と相当高いものとなつて

いる。このほかに一〇位までの輸入品目では豚脂などの畜産品や銅、石油、磷鉱石などの鉱産原料が目立ち、輸入面では全体として食料品、畜産品、原料品が大部分を占めて先進工業国型の輸入構造に類似しており、イギリスに對する関係とはかなり異なつた傾向を示している。

このようにアメリカとの貿易構造は、輸出については軽工業国ないし後進工業国的、輸入においては先進工業国的ともいふべき特異な構造をうちだしているが、このことは一つにはアメリカの經濟構造自体が急速な資本主義的工業化をとげつつもなお農業国的な側面を多分に残していたという事情からくるものであろう。

むすび

以上において、われわれは金融資本の本格的な形成期である一九世紀末葉から二〇世紀初頭にかけてのドイツの対外貿易構造にかんして、主として商品構成のあり方という角度からまず全体的な概観を試み、つい

第5表 アメリカ合衆国との貿易構造 (1902年)

(A) 輸出

(100万マルク)

順位	品目	アメリカへの輸出額(A)	当該商品(B) 輸出総額	A/B	アメリカの輸出総額(C)	A/C
1	陶磁器	44.4	93.7	(%) 47.3	40.7	(%) X
2	綿製靴下, 手袋	22.0	72.9	30.1	22.3	98.6
3	半絹布	21.9	91.1	24.0	68.0	32.2
4	塩化カリウム類	21.4	44.3	48.3	31.1	68.8
5	アニリン染料	18.3	89.3	20.5	20.6	88.8
6	綿布ししゅう	17.4	124.0	14.0	94.1	18.4
7	印刷用品	16.9	102.1	16.5	30.2	55.9
8	玩具	15.6	55.4	28.1	16.8	92.8
9	革手袋	11.3	18.9	59.7	22.3	50.6
10	砂糖	10.6	159.4	6.6	26.5	40.0

(B) 輸入

順位	品目	アメリカからの輸入額(A)	当該商品(B) 輸入総額	A/B	アメリカの輸出総額(C)	A/C
1	棉花	244.3	319.6	(%) 76.4	1222.2	(%) 19.9
2	小麦	134.1	271.6	49.3	474.2	28.2
3	豚脂	82.1	85.4	96.1	219.7	37.3
4	銅	67.5	84.7	79.6	164.2	41.1
5	石油	58.4	71.7	81.4	223.9	26.0
6	油かす	22.6	58.5	38.6	83.6	27.0
7	用材	21.2	92.5	22.9	70.6	30.0
8	マーガリン類	19.2	21.8	88.0	53.8	35.7
9	棉実油	18.8	23.9	78.6	54.2	34.6
10	燐鉱石	14.7	19.8	74.2	24.4	60.2

第2表参照。

Josten, a. a. O., SS. 102-105. により作成。

で一九〇二年という時点をとらえてドイツの通商相手国のなかから貿易規模の点で重要とおもわれる四ヶ国を抽出して、いわば個別的にそれら諸国との輸出入商品の構成について考察してきた。商品構成を全体としてみれば、国内における重工業を中心とする急速な工業生産の発展に対応しつつ、農畜産物および原料品の輸入、完製品の輸出という先進工業国イギリスのそれとほぼ類似した形態をあらわしていたが、仔細に検討すればその具体的内容はイギリスとは相当異なるものであった。すなわち中・東欧の後進農業諸国に対しては上述のような先進工業国型の貿易構造をうちだしながらも、工業国グループに対してはなお軽工業国ないし後進工業国的な性格を強く残していたのであって、いわば貿易における二重構造とでもいうべききわめて特徴ある傾向を示していたのである。

しかし、このような二重構造的な貿易構造のあり方は、発展途上にある新興工業国としてはいわば当然の事態であるとも考えられるのであるが、問題の核心は

むしろ前述のようにかかる特異な貿易構造が、たんにドイツの工業的發展にともなう国際分業關係の変化を意味するにとどまらず、国家の政策や独占体のさまざまの対策をつうじて意識的に維持されていた点に求められなければならない。形態的には自由主義段階における工業国の貿易構造と類似していたともいえようが、そのもつ意義は全く異なるものであった。もちろん一国の貿易構造はさまざまの要因の複雑なからみあいのなかで形成されるものであって、帝國主義的な諸政策との関連を一義的に論じることが不可能であるが、たとえば、先にもふれたように中・東欧の後進農業諸国に対するドイツの先進工業国型の貿易構造は、一八九〇年代以降における関税率の相互的軽減をともなつた通商条約網の形成政策によって促進されたことは否めないであろう。この地域はもともとイギリスとのあいだにはげしい通商角逐の演ぜられた場所であつて、ドイツの輸出の伸長はその大部分がイギリスの犠牲において実現されたといわれ、⁽¹⁾ それには通商条約にもと

づく長期安定的な通商関係の樹立が大きな役割をはたしており、ドイツ商品の世界市場への飛躍的な進出は中・東欧市場の安定的確保を基礎としてはじめて可能であったといえよう。そのほか資本輸出や独占体によるダンピングなども商品輸出拡大の重要な手段とされたのである。かように、この時期におけるドイツの二重構造的な特異な貿易構造は帝国主義的諸政策とかなり密接な関連をもっていたと考えられるのであるが、小稿では問題点の指摘にとどめて詳細な検討は次稿にゆずらうとおもう。

(一) Hoffmann, op. cit., p. 131.